海外迷所案内譚（ばなし）

第一部［タイ北部を訪ねて］前編

色染昭 48 年卒　石田泰和

はじめに「**海外迷所案内譚**（ばなし）」とは

会長の方からまたギターのことでも何でも良いので、書いてほしいとのご依頼がありました。前回のマンドリンの続きも芸の無い話、ここは気分転換に旅の話題等と執筆し出した次第です。

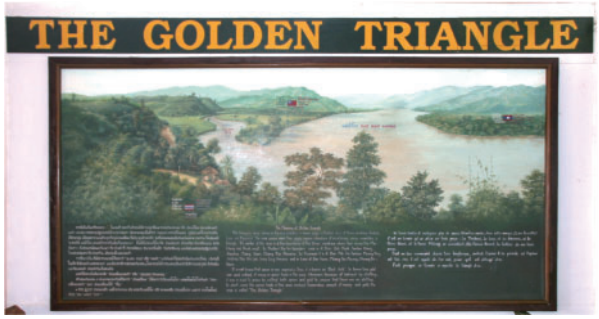
単なる海外旅行報告、旅の自慢話ではつまらない、さりとてもっと素晴らしい旅行記や旅の案内などの雑誌が山のようにあふれ今更、ど素人が書いた旅行記など、はたして読んでいただけるかどうか？と考えながらの執筆です。掲載は 5 度目になるかと思います。

そこでこれまで経験してきた海外旅行で、これは酒の肴（さかな）になりそうなネタを選りすぐって報告させていただきます。話せば長い・・・とても A-4 数枚で収まらないので、今回はシリーズを数回に分けて書かせていただく予定ですが、一部に引き続き、第二部は「世界有数の美女の国」、三部は「世界一有名な観光地に観光客がゼロ」などを予定しております。なお二部三部は都合で合体になるかもしれません、一部を読んでいただき評価もお聞かせいただくと次の執筆の励みにもなります。

当方も世界中を巡って、それほど多くの海外旅行を経験したわけでもありません。数少ない旅行の中から記憶に残る旅行先の珍しい譚（はなし）を、複数回の長編シリーズにわたってご報告したいと思っております。もしも話題性に乏しく、なぁーんだ所詮海外旅行の自慢話かーなどと評判も芳しくなければ、途中で打ち切りも十分ありますことをご了解ください。

なお、現在は膝を痛めコロナ以降は海外旅行もいけなくなってしまいました。これは最近の話ではなく、中には 10 年以上前の話のネタもあります。現在は大きく変わっていることとおもいますが、その当時の旅先で出会った珍しい話を書かせていただきたいと思いますのでご理解ください。それと旅行先については特に珍しいところ、やあまり日本人が訪れないところばかり選んで行ってるわけでなく、当然のことながら家族サービスのおきまりのハワイ、グアム、サイパンといった、ごくスタンダードな旅行も経験してのプラスアルファーとお考えください。

今回テーマも「名所？→迷所」とさせていただき、わざわざ報告するような大層な話でもないので、お酒の席での語り話の感覚、少しレベルの低い話、あまり経験したことのない珍しいお話と言うことで「譚」という言葉を使わせていただいております。



ここが有名なゴールデントライアングルのど真ん中、３国の接点付近です。パノラマ合成写真全景で、右がラオス、中央左側がミャンマー、手前撮影側はタイです。いずれも川の中央が国境です。左写真は現地観光スポットのガイド看板です。

第一部「タイ奥地、ゴールデントライアングル、首長族を訪ねて」

下(オレンジ)がタイ、左上がミャンマー(青)、右上がラオス(ピンク)。これで見るとベトナム(朱)、中国(赤)も目と鼻の先です。

はじめに、ゴールデントライアングルとは何ぞや、この名前はお聞きになった方もあるかと思いますが、東南アジアのタイ、ラオス、ミャンマー(ビルマ)の3カ国が接する、ちょうど三角形の形になった地区で、今も絶えることなく麻薬の取引が続いています。かつてこの地域は世界最大の麻薬の生産、且つ取引地域で、その取引は現地通貨はおろかドルやポンドの世界共通の基軸通貨でなく、金(きん)そのものの重さで物々交換されていた地域でこの名称がつけられました。

しかも政府も管轄の及ばない、麻薬組織がこの地域を取り仕切っていて、独自の武装組織をもち、それこそ独自の治外法権がまかり通るという物騒な存在地域でした。

写真は現地の観光地設置の看板写真ですが、これで見るとトライアングルの3カ国に加えて中国、ベトナムも目と鼻の先に位置し、つまり東南アジア5カ国がほぼ国境を隣接するといった、お互いの国の権益と利害関係が複雑に絡み合っている地域で、且つ世界の麻薬市場を牛耳る代表的な危険地域であることがわかります。つまりここは昔から貧しい地域で産業などほとんど発展してこなかった地域で有りながら、麻薬そのものが重要産業で栄えてきた地域なのです。

メコン川の主流、支流が合流する中央付近が三国の国境点、川を渡ればよその国。

現地へ行ってみるとわかるのですが、これらの国境線はきちんと塀や有刺鉄線で囲まれているわけもなく、川の中央付近とか山々の尾根づたいに一定の距離で旗竿が立っていて、これらが国境だそうです。ガイドに聞くとあの旗印がタイとミャンマー国境です等と教えてくれ、国境を越えようと思えばいくらでも出来るが管理に関しては国道の要所要所に検問を行っていて、特に麻薬の持ち出しや持ち込みに対しては厳しく取り締まりを行っているそうです。

このタイ北部を旅行中にも何度も検問にかかりました。

我々の車はガイドが登録ライセンスを提示することでフリーパスで通れますが、地元の車両はそうはいきません。

トランクや積み荷はもちろん、大きな反射鏡を使って車の底まで念入りに調べており、まるで映画に出てくるような国境検問のような光景を何度も目にしますと、あーここはこういう危険と隣り合わせのまっただ中、日本では平和の存在などは普段全く気がつかないで、何気なく暮らし

道路の要所要所では厳しい検問が当たり前の風景です。2車線を1車線に変更しての検問です。

ているのが当たり前ですが、こんな光景が日常当たり前の地域に来ると一歩間違えると極めて危険なエリアにど真ん中に入ってきたことをひしひしと感じます。

ゴールデントライアングルについては、はやくから NHK の TV ドキュメントでも取り上げられており、世界の麻薬の巣窟として世界的にも危険なデルタ地域の一つとして有名でしたが、前回訪れたチェンマイでガイドから、タイの北部のかつての麻薬地帯や首長族の村を訪ねるオプショナルツアーがあると聞いていましたので、次は是非行ってみたいと思っていた旅行先でもありました。しかも日本人が心配するほど今は治安も悪くはない安全なツアーで、自社のツアー会社からもオプショナルで出しているのでどうか、ただ日帰りは日程や距離的にも無理なので、2 泊程度泊まりのツアーになるとのことで、このときはすでにスケジュールを組んでしまっていたので諦めた経緯があります。

今回はこのタイ北部旅行ためにわざわざ日本でこのツアーを取り扱っている会社を探したところ、ほとんどの大手はこんな危険な？地区へのツアーは扱っていないと断られ、この頃の日本ではまだまだゴールデントライアングルなどと名前を出すだけで、危険きわまりないゾーンとして全く相手にされない、もしも何かことあれば帰ってこられないのでは？のイメージが浸透していたのが現実でした。
仕方がないので、以前からつきあいのあった国内の団体旅行専門の小さな旅行会社に調べてもらい、ようやく取り扱う現地の旅行会社を探し出しくれたというわけです。

「ワット・チェディ・ルアン」 チェンマイでは最も有名なお寺、かつて日本の化粧品の CM にも使われたことがあると思います。
ワットはお寺の意味、その名の通りチェンマイで最も大きな (ルアン) 仏塔 (チェディ)。
4 方向に階段があったのですが、崩れてしまってそれを修復する際に 1 方向だけ階段を残し残りをスロープにしてしまって修復したそうです。
日本の文化庁が見たら卒倒しそうな修復方法がまかり通るのが、文化の違いによるものでしょうか？

中段にもかつて四方左右均等に象の彫刻が並んでいましたが朽ち果て残った象がこの姿です。
修復の際せめて象の彫刻ぐらいは復元してほしかったですね、全部象が揃って飾られていた当時は、さぞかし荘厳であっただろう姿です、1 個 1 個の象の彫刻が見事です。

［チェンマイからの始まり］

関空からタイへは直行便でバンコックへ、国内線を乗り継ぎチェンマイに入ります。初日はチェンマイからのスタートでバンコックを東京にたとえば、チェンマイは京都・大阪のような関西風の感覚です。どこか庶民感覚に近い親しみのある古都で、2度目の訪問でしたが前回はチェンマイを起点にずっと南下してスコタイ遺跡、アユタヤ遺跡などの有名な観光地を見てバンコックに入るといったコースでした。
したがって、今回はチェンマイから北上してこのタイ北部を訪ねてみようとの試みです。

一通りおきまりのコースでお寺を巡って、象に乗って散歩といった定番の観光でしたが、今回初めてみた面白い光景をご報告、是非読んでいただきたいことがあります。

・・・・〈ここからは飲食中の方は飛ばしてください〉・・・・

タイ旅行で象と出会うのはこの国では珍しいことではないのですが、象を使ったショーの中で象使いが象に乗って川に入り水浴びさせるのですが、その際出た象の排泄物を下流にて女性がざるにて回収、その場で川の水で洗浄して繊維質のみを残し、その繊維質をアルカリで煮て、たぶんそれに多少何らかの芋のようなデンプン質を混ぜているかもしれませんが、漉（す）いて紙を作り、乾燥後それを帰りに土産に販売するという実演がありました。

これは初めて目にする光景でしたが、そういえば日本にも馬糞紙と呼ばれる単語が残っていますが、もちろん馬の排泄物は使っていませんが、調べてみると米藁や麦藁を砕いてアルカリ（苛性ソーダ）と一緒に煮てのりと混ぜてすいて紙にするとあります。
日本の場合の名称は単に色が似ているというだけでこの名前「馬糞紙」になった様ですが、これは名前そのものの紙「象糞紙」です。いずれにしても紙が伝わってきたルーツが中国ですから、ルートが違うだけで応用面も？象の排泄物利用に変わっていったのかもしれません。
なんだか臭（にお）ってきそうな紙です、さすがに土産にはいただけません。

なお、参考までにパピルスはパルプの語源になっていますが、エジプトの土産に現地から持ち帰った、古代製法を忠実に再現したパピルスを保存していますが、よく見るとパピルスの茎を開いて平らにし、縦横交互に平織りして紙状にしてのり付けしたもので、文字を書き写すことは出来ますが決して紙というものではありません。

水浴びをさせて象のクリーニング中、動物が喜ぶ姿を見るのはなんともいい光景です。
気持ちよく水浴びすると当然でるものも出てきます。象使いはほとんどが少数民族です。

象の ××× を回収、洗浄で、これがお土産の紙の原材料になります。
象そのものを扱う仕事はタイでは少数民族で、一般にやはり職に就く場合、教育面などに差があり不利に働くため、観光中心の職場で働いているそうで、現地ではこういった作業が貴重な収入源です。

話は戻りますが土産の失敗談で、以前ベトナムにて土産に「コピ・ルアク」と呼ばれるジャコウ猫のコーヒーという豆を買ったのですが、これはジャコウ猫にコーヒーの実を生のまま食べさせ、この猫独自にもつ腸内の特殊な酵素で発酵、排泄物に含まれる消化せずに出てきた豆をきれいに洗って、焙煎し高級コーヒーとして、これまた土産物で結構高く売っています。当たり前の話ですが一般の猫ではダメらしいですが・・・

この貴重なコーヒーは高級ホテルで飲むと 1 杯 8,000 円もとるところもあるらしいですが、この「コピ･ルアク」は高値で取り引されるため、土産物で偽物や混ぜ物の被害が後を絶ちません。ただ自然にいるジャコウ猫はコーヒー豆ばかり食べていませんので、採れる量が限られているらしく、おそらくビジネスとして飼い猫にして、フォアグラ製造のように無理矢理胃袋に詰め込むのでしょう。これを大枚はたいて土産に買ってきて事務所でご披露し、試飲してもらいま

したが、この豆のいわれのうんちくを話したところ製造過程に抵抗があるのか？すこぶる評判が悪くなってしまい、未だに冷蔵庫の片隅にひっそりと放置してあります。
（ちなみにコピ・ルアクは Amazon で 5,890 円／ 100g ぐらいで売ってます、土産であまり安いのは怪しいらしいです。）

　ところで日本でも明治に入る以前、特に用紙の技術が伝わるまで紙は貴重でしたので、もしかしたら江戸時代以前は本物の馬糞を使って安物の紙類を作っていたのではと一瞬疑いをもつ光景でした。つまり馬糞紙ならぬ、象糞紙といったほうが手っ取り早い名称です・・・すいませんね食事中の方があればごめんなさい・・・・話題のレベルが低すぎて後半はもっと上げていきます。
かつて紙が貴重だった時代こういう動物を使った製造方法が中国から東南アジア、日本にも伝わった可能性があるのでは？と興味を引かれる光景でしたが専門家でない私にはよくわかりません。兎に角やはこの象糞紙の土産はどうしても買う気にはなれません、ジャコウ猫のコーヒーで懲りてますので、結局お土産で象糞紙を買うのだけは躊躇させていただきました。

　さて、今回は団体旅行の一団でなく特別に組んでもらった旅行のため、ガイドはコース途中なら好きなところへ案内する、射撃ができるところがあるとのことで、それじゃついでに案内してもらい、生まれて初めてでしたが 38 口径、45 口径ピストル射撃、22 口径ライフルの射撃などもやって見ようかということで立ち寄りました。
もちろん日本国内でやると違法ですがタイでは観光用にピルトルライフル射撃が公然と許されています。弾も軍隊から横流しを受けているらしく安く調達しているとかオフレコの噂話でしたが・・・・
　それと現地のスタッフの話によると、またまたここだけの話ですが・・・時折日本のマフィアが練習に来ると言ってました。

良い子はまねしないでください。
国内で無許可で銃を撃つことは
出来ません、罰せられます。

　長年、少年補導の支部長をやっていましたので担当してくれる警察の生活安全課こと、略して〔生安〕と呼ばれる担当者など交流ができ、親睦の席で色々あまり公に出来ない話も聞くことが出来ました。その中で実弾発射訓練、すなわち射撃の話が出て、警察官もいざというとき射撃経験が無いといけないとのことで、どうやら年に一度ピストルの実弾訓練参加が義務づけられているという話を聞いたことがあります。

下手な鉄砲も数打ちゃ・・・
ここまで当たりました。

　従ってやはり例の特殊団体もいざ抗争で銃を使うという場合に備えて、行き成りではなくまず経験を積んでということかどうかはわかりませんが、バカンスもかねてかこういったところで練習しているのかと納得です。あの団体も当時は暴対法もようやく効果の出始めたばかり、まだまだ日本全体が元気で、あの業界も羽振りも良かった時代でしたから、出張＋実射トレーニングなんてことがまかり通ったのかもしれません。

ところで〔生安〕の担当者からも「ピストルはなかなか当たりませんよー」と聞いていましたが、いざ自分で撃ってみるとなるほど、映画や TV ドラマでやっているほど命中しません。
現地射撃場の的（まと）までは約 30mぐらいもあり、10m以上離れるとなかなか的に当たりません。映画のシーンでイケメン俳優が銃を持つ悪役相手の手に傷を負わすことなく、銃のみに弾を当てて手からはね飛ばすというのがありますが、あれは絶対無理です、どんな名人でも握ったピストルのみに当てるなどとは至難の業、ほとんど不可能に近いと思います。
また 45 口径になるとかなり反動が有り、映画では空砲のため片手でばんばん撃っていますが、あれは男でもかなりしっかりもたないととても無理です。

やくざ映画で女性俳優が片手でいとも簡単にばんばん撃ってるシーンがありますが、これもまず反動なしには片手射撃は不可能ではないかと思います。片手で自動小銃を打ち続けるなど本当にできるのでしょうか？うたがいたくなります。

白亜の寺院　「ワット・ロンクン」チェンライではもっとも有名なお寺、TV, ネットいろいろな旅行ガイドでも紹介されていて、ご存じの方もおられると思いますが、近代的感覚で作られた比較的新しいお寺です。

タイの観光地でアユタヤ、スコタイといった世界遺産を期待して訪れるとちょっと場違いなお寺です。お寺の現代アートを取り込んだバージョンといえますが、ちょっと不気味なアートですが、国内の学生旅行等の人気スポットになっており、訪れた日も若い人たちでごった返していました。

タイで１番美女出会えると言われるのがタイ北部のチェンライ、チェンマイ。
北部の少数民族は美人が多く、その DNA を引き継いでいるのではないかと思われます。
チェンマイ美人、チェンライ美人とネットで検索すれば続々と出てくるほど有名らしいです。
（チェンライでたまたま出くわした花の展示会のイベントの会場でのガイドさんです）

〔さてここからいよいよテーマの本命に入ります。〕

チェンマイで２泊し一通り定番のお寺巡りの観光も済ませ（そういえば余計ですが前回訪れたときはテレサ・テンが亡くなったチェンマイのホテルで夕食というコースが含まれていましたが、今回は無しです・・段々彼女を知る世代も少なくなってコースから外れていくのでしょうか、たしか亡くなった部屋はそのままにしてあり、ホテル内の観光名所として見学させてもらったと思いますが）全く余計でした・・・

いよいよ、３日目には大移動となります。一般道路の移動でしたが半日以上かけて何回も山岳地帯を越えて夕方ようやくチェンライの町に入ってきました。
掲載写真はチェンライの観光ガイドによく出てくる白いお寺と呼ばれる人気寺院だそうです。お寺というと日本人には古いほど値打ちのあるように想像しますが、ここは比較的新しいお寺で、地元の若い人たちに人気があるお寺で、写真にあるような腕先が何本も地面から生えてくるようなモニュメントが特に有名です。せっかくここまで来たのですから一応記念に見てきましたというわけで掲載しております。

〔1 部後半はいよいよ首長族の村に入ってきます〕

海外迷所案内譚（ばなし）

第一部［タイ北部を訪ねて］後編

色染昭 48 年卒　石田泰和

［首長族の村到着］

チェンライで一泊し、翌日チェンライ市内から１～２時間だったと思いますが山間部に入りいよいよ首長族の村に着きます。ちなみにチェンマイ、チェンライ、チェンセン等の「チェン」はタイ語で都の意味で、都が変わるたび、つまり遷都するとチェン・・・となっていくそうです。

ここはタイ国内にミャンマーの少数民族（アカ族、ヤオ族、ラフ族、カヤン族、カレン･パドゥン（首長）族等の複数の少数部族を集めての観光村です。入場料を払って村に入ると山の山腹にいろいろな民族が集落を構えており､」それを順に巡って行くというコースです。その中の一つとして首長族の村の集落があると想像してください。

現在なら首長族も結構有名に成りましたが、この当時ですとこの話を聞いた友人がいつの間にか､”首狩り族のところへ旅行してきた”という話に変わってしまっていて、慌てて否定したのを覚えています。また数年前に行ったバンコク市内で聞いた情報では、このバンコクにも観光客相手に首長族の村が誕生して、観光ビジネスを狙ってタイ奥地から進出しているとの話も聞きました。当時はまだまだこの村の存在は珍しく、ガイドに聞くとこれらの民族は元々ミャンマー（ビルマ）の出身で、当時は自国の治安が悪く国境を越えてタイの山奥に逃げてきて住みだしたのだが、居心地がいいのと観光で飯が食えるというのがわかったため、それ以来ずっとタイから祖国に戻らないそうです。国境を越えて他国に居座るというのはぴんとこないのですが､「国境警備はどうなっているの」とガイドに聞くと､山の尾根を指さして「旗が順番に立ってるのが見えるだろう、あの旗が国境で柵も塀も何もない、政情不安が続くと旗を超えて違法に越境、安定すればまたもどるとの繰り返しです」とのこと。元々昔から国境など無い時代から自由に山を越えて行き来していた民族なので、あまり越境する感覚などと関係無く暮らしてきたのが事実かもしれません。

←ここは観光村のようになっていて、各部族の村を順番にめぐって回わります。

民族衣装によってそれこそ何族かわかるそうで、村の（観光のための施設）あちこちの集落で違ってきます。派手な飾りをつけているのは「アカ族」と呼ばれる山岳民族です。

赤ちゃんを抱くアカ族のお母さん

頭にスカーフを巻いているのはラフ族？
記憶違いかもしれませんが

ほかの少数民族は何族と称していますが、
首長族の正式族名は「カレン・パドゥン」
族だそうです。
略してカレン族とも呼ばれています。

こちらが機を織っている少女の控室、隠し撮りではありませんが、彼女がちょっと席を外した際に撮らせていただきました。中央の赤黒の織物が目隠しに TV と DVD に掛けられています。

アカ族の見事な頭飾り、きれいです。

これぐらいたくさんリングをまくのに何年かかるのでしょうか？

↑首の裏側はどうなってるのと尋ねると、親切に見せてくれました。チップが効いたのでしょうか？簡単には外せないようで、寝る時も外さずにこのままのようです。かゆいときは？

少数民族の少女、子供のころから目鼻立ちがくっきり、いずれは美人の仲間入りを約束されているような容姿です。

普段は観光客へ土産物の織物を織る少女

こんなに小さい子供の頃からリングをはめて、未来の美人を目指しています。泣き顔がなんともあでけないです。

幼い頃から腕や足（膝）リングをつけて徐々に体を慣らせておくのだそうです。かなりの重量になることから考えて子供には結構な負担になるのではないかといった印象です。

首の長い女性が美人の象徴で美人の度合いを表します。したがって村一番の首の長い女性で、すなわち村一番の美人の出迎えです。

少数民族はなぜか美人が多くタイ国内でも有名、一見する日本人と見間違うような顔立ちです。

　ガイドのほうから写真スナップを１枚撮る度に１ドルチップを渡してほしいと言ってきましたので、まあ当時のレートで１００円程度、缶ジュース１本自販機で買って彼女らに配っている感覚で渡していたと思います。当時のレートからすればあれで写真を撮ってもらうだけでいい稼ぎになっていたのではないかと思います。

それともう一点「この人たちは昼間一体何をしているの」とガイドに聞くと、昼はタイ政府のほうからきちんと学校に行かせてもらっているらしく、タイ側も観光外貨獲得資源として、自国民として難民受け入れ体制が整っているようで、結構優遇されているように感じました。
　彼女らのいる小屋の部屋に入ってみて、首長族の暮らしをみせてもらいましたが、あくまで観光用の演出がなされています。彼女らが少し席を離れた際にこっそり小さなカーテンをめくって見ると、なんと液晶 TV と DVD プレイヤーが隠してありました。その点やはり若い女の子ならなおさらのこと、文明の魅力には勝てないのが現実で、客の来ないときは彼女らも DVD を見て楽しんでいるのかと改めて納得で安堵しました。

　タイ北部の少数民族に接してハッとさせられるのが、写真でもお分かりのように大変日本人に顔立ちが似ているということで、いろいろ調べてみるとこの首長族（カレン族）やアカ族などはタイ南部の東南アジアの人とは少し顔立ちが違います。
そもそもアカ族等はチベットや中国南部の雲南省山岳部方面からタイ北部に流れ着いたとされ、また元々は中国少数民族で、雲南省ではハニ族とも呼ばれ、日本の弥生時代の遺跡等から見つかった人骨と DNA・骨格等が一致又は酷似しており、日本人のルーツの一つではないかという説もあります。またその風習も村の入り口に鳥居があったり、棚田があったり、味噌や納豆を食べる麹文化が有ったりしてなぜか親近感が持てますが、そのルーツはいまだなぞとされております。

　ところで、明治の頃から論争のあった、日本人・ユダヤ人同一祖先（日ユ同祖論）という説が近年 DNA 学の発達により再び論じられるようになりました。詳細はネット、Youtube などを見ていただければたくさんの論説が出てきて夢が膨らみますが。要約すれば古代イスラエルは、ダビデ王とソロモン王の時代に統一王国として栄えましたが、ソロモン王の死後、その 12 人の子供のうち、１０氏族が北イスラエル、2 氏族が南ユダ王国に分裂し、北は 2800 年ほど前にアッシリアによって滅ぼされてしまいます。南ユダ王国はその後ローマの支配下に置かれ、現在のイスラエルにつながる流浪の民族のルーツですが、北の１０氏族が歴史から忽然と消えて、その行方が長年分からなくなっていました。
　ところが、近年その痕跡を世界中にわたって調べた人物があり、（詳しく書くとまた書面が 1 ページ程を要りますのでネットで調べてください）それによるとユダヤ失われた１０氏族の末裔が流れ着いた先が、インド北部のカシミール国家、ミャンマー北東部のカレン族、インド＝ミャンマー国境地域のシンルン族（マナセ族）、それとシルクロード伝いにこの日本にたどりついた秦氏や物部氏の渡来記録等に痕跡があり、また日本の八坂神社の祇園祭や諏訪大社の祭りなど神道の習慣もイスラエル民族の古代儀式に共通点がみられられる等の論説です。
さらにこれに他の研究者から天皇家の祖先や菊の紋章などの話が絡み、いろんな説が飛び交っているのが現状のようです。
（※この失われた１０氏族の末裔が流れ着いた世界中の先の調査報告はイスラエル政府のユダヤの特務機関アミシャーブ氏の調査報告として出版物となっておりますが、筆者は読んでおりません）
　そんな理由かどうかはわかりませんが、このタイ北部少数民族は大変日本人に似ている、親近感を抱きたくなる部分があるようです。近年この古代 DNA 解析研究が驚くべき進歩を続けており、いずれアフリカを起点とする世界中の民族移動のルーツがわかる日もそう遠くないようです。

話が少しそれましたが、この後訪れたゴールデントライアングル地域にて興味の引かれたところは、ぜひ麻薬博物館を紹介したいと思います。当時この地域はアヘンの製造が重要産業でそれに関する資料が一堂に集めてある記念館になっています。詳細説明は出来るだけわかりやすいように多めの資料写真を掲載、写真ごとにつけております。
今回のガイドも子供の頃、何もわからずにこの地域でケシの花の収穫のお手伝いをしていたという話もしてくれました。当時はけしの実の栽培など犯罪の感覚は全くなく、村を挙げての一大産業であったこの麻薬製造に、村中総出でアヘン栽培に従事していたのでしょう。

その後は川を渡ってラオス側へ２度に渡り入国、１度目は頼りない小さい小舟とトヨタの中古エンジンに命を託しての渡船入国、救命胴衣もついていません。こんなツアーですから日本国内の大手の代理店では取り扱わないわけです。ツアーで救命胴衣なしの船に乗るのは後にも先にもこれが初めて、たまに行く小浜の遊漁船でも最近は海上保安庁の取り締まりが厳しく、ライフジャケットを持参しないと、なしでは乗船させてくれません。日本ではありえない！
以後、特筆すべきこともあまりなくタチレクから歩いて橋を渡ってミャンマーへ入国、トゥクトゥクと呼ばれる乗合タクシーに乗り換えて日帰り観光となります、この３国は文化が近いためたいとよく似た寺院の観光コースとなります。最終日はこのゴールデントライアングルともお別れ、途中また何度も麻薬検問をくぐりチェンライに戻り国内線を乗り継いで帰国となりました。

おしまいに、現在このゴールデントライアングル周辺一体は国策でケシの栽培が全面禁止され、これに代わり蘭の花のバイオ技術を使って蘭の花の品種改良を行う研究栽培所も作られて、世界各地に輸出を行っているそうですが、麻薬そのものは相変わらず根絶できず現在に至っております。特に近年はアヘンやヘロインが取って代わって、メチルフェンタニル等の合成麻薬と呼ばれるものが取って代わりきており、ケシの花の栽培にわざわざ広い敷地や農地を使わなくとも小さな工場規模で生産できるため、お隣のラオスやミャンマーでは軍主導の元で作られた合成麻薬が、やはりこの地域に国境を越えて入ってきて、全世界に流れていということで、国境はじめ主要国道での厳しい検問を実施して未然に防いでいるというのが現実のようです。

第２部は**「世界有数の美女の国」をたずねて**　をお楽しみに、乞うご期待！
〔これこれより写真集が続きますが、詳しく注釈を書かせていただいてます、ぜひ読んでください〕
（今回はお寺などの観光写真は数百枚撮ってきましたが、趣旨が違うのでほとんど載せていません）

アヘンを吸引する老人、実に生々しい写真ですがあくまでマネキンで、博物館を飾っています。写真だけ見せればまるで本物のアヘン中毒患者の写真かとおもわせます。ちょっと不気味で怖いですね。竹で出来た壁や床がいい雰囲気を演出しています。かつてこういう光景が日常あちこちに見られたのでしょう。

博物館にあった首長族の装飾リングです。これだけでも相当な重さで女性にとってはかなりの負担と思います。美人になるにはどの国に行ってもそれなりに努力と忍耐が必要なようです。

↑けしの実の種まきから収穫、そしてアヘンの製造、アヘン交換交易と１年を通じて、何月から何月はこの作業と季節ごとに詳しく描かれた、アヘン製造行程のカレンダー？、紹介絵。いかに村の重要産業だったことがわかります。

これも吸引道具のコレクションです。→
おびただしい量です。

こちらはケシの実に傷をつけてアヘンを含む液体を取り出す道具とその使い方の解説でしょうか？右上にあるのがケシ実のドライフラワー（本物のケシの実です）

けしの花とけしの実、ご心配なくもちろんこれは造花です。

アヘンの取引に使ったのでしょうか天秤ばかり。これでアヘンの量を測って現金ならぬ金そのもので取引したのであろうと思われます。

吸ったことがありませんが（当たり前です）昔あったたばこの水パイプのような方法でアヘンを吸引する壺のようです。

ショーケースに所狭しとばかり並べられたアヘンの吸引道具の陳列棚、かつてこれで人間をやめていった人たちが大勢いたのでしょうね。あるいはアヘン戦争のような国を揺るがすほどの大きな戦争になり国土の一部を 100 年近く奪われた国もあったわけです。

〝アヘンキャラバン〞を描いた絵画採れたアヘンを積んでいざ出発、取引市場へ外貨獲得の花形産業を象徴する、大きな絵が壁に掲げられていました。村の誇りだったのかもしれません。

メーファー・ルアン・ガーデンかつてのアヘンの産地として悪名高かったこの地域のケシ栽培畑は政府指導の下で王立のバイオ技術の蘭栽培研究所に生まれ変わり、大きな植物園が併設されています。

国境沿いに流れるメコン川。川向こうはラオスです。淀川の岸辺のような船着き場から隣国行き？海外に向けて渡船が発着します。

←タイからラオスへ渡る入国管理事務所と船付場の案内看板。
事務所というより小屋に近いです。
なにやら怪しい日本語と英語がタイ北部の国境の町に近づいてきた、生々しい雰囲気が伝わってきます。

国境　泰ー〇　／ﾗｵｽ-ﾀｲ
船のりば
この〇字はなんと読むのでしょうかね？ラオスという漢字ですか・・・
泰国はわかりますが、よくわかりません。
ラオスは日本では「羅」、「老檛」
中国国内では「老撾（簡体字」と表記し「老」と省略しますが、台湾 香港、マレーシア、シンガポール では「寮國」簡体字：「寮国」と称し、「寮」と省略するとあります。この「寮」字の間違いでしょうか？

船の動力は日本車の中古エンジン、トヨタの中古車からもぎ取ってきたのか自動車エンジンを改造、頼れるはメイドインジャパンのエンジンのみ、これに全乗船者が命を託します。「がんばれトヨタ、止まらないで！」

この頼りなさそうな船で対岸の国、ラオスにわたります。船と言うよりボートと呼んだ方がふさわしい。この付近には橋がありません。船が唯一国境を渡る手段です。
救命胴衣も船の安全なんて言葉はこの国の辞書にないのでしょうか、大手の旅行会社が取り扱わない理由がこんなところにもありそうです。→

ゴールデントライアングルの川向うはラオス、メーサイと呼ばれる国境の町
バザールにはありとあらゆるものが並びます。国境の町は古くから交易の町です

川向こうのラオスの集落、ここでは観光が主要産業ですが、ここでは買いたい土産物がありません。
なんと自国の紙幣を袋に入れてセットにして売っており、思わず衝動買いしてしまいました。

屋根や歩道に置かれたパラボラが赤道上空、ほぼ天に向かって真上に立っている光景を見ると、あらためてここは赤道に近い国と実感します。

ミャンマーに渡るとトゥクトゥクと呼ばれる乗り合いタクシーが観光の交通手段に代わります。現地では重要な輸送手段で乗合バスのようになっていて、値段はその場で運転手と交渉らしいです。→

↑こういう女性に作ってもらうとなぜか親しみを感じ、麺料理もうまく思えてきます。お昼はここで昼食です。

←東南アジアでは定番のホーと呼ばれるお米の粉の麺料理。地元のラーメン屋みたいな感じで地元の客でにぎわっていました。熱い国です、地元のお客は唐がらしでスープを真っ赤にしていました。

国境の町「タチレク」からミャンマーへは川にかかる橋を歩いて渡り入国します。
タイからみて出国は右側、入国は左側通行と別れていて入国管理事務所も左右に別れています。ここでも早く手続きを済ませたい場合は役人へ袖の下が横行します。ガイドが何やらチップを渡していました。大きなゲートが入管事務所です。

橋を渡れば国境越え、鴨川よりも細い川を渡り四条大橋ぐらい橋の両方の付け根に両国が出入国事務所を構えています。ミャンマー側からタイへの日帰りの出稼ぎ人で朝夕はごった返すそうです。同じくゲートがミャンマー側入管事務所です。早く入国を済ませるにはこちらもチップが横行です。

←人々でにぎあう国境の町タチレクのバザール風景

帰途、チェンライ空港に向かう途中の検問風景。このタイ北部旅行は検問に始まって検問にて終わります。

第一部［タイ北部を訪ねて］　終わり